

2 歳児の興味と理解

— 紙芝居を通して —

研究第8部 星 美智子

I 研究目的

これまで、2歳児の行動特徴、笑いの観察を通してみた2歳児の行動特徴、2歳児をもつ母親の育児不安、などについて研究をすすめてきた。今回は、紙芝居の実践を通して、その興味と理解を検討し、2歳児の特性を把握することを目的とする。

II 方法

〔材料〕

1) 《こぐまのこぐちゃん》《もりのぶらんこ》《りりんかっぱかっぱ》《おおきなだいこん》の4種類の紙芝居

2) あらすじ

《こぐまのこぐちゃん》(8枚)

こぐまのこぐちゃんが、山の上からつみきの自動車でおりてきて、つみきがばらばらにこわれ、こぐちゃんはころんでしまう。救急車が来て、こぐちゃんを病院に運んでいく。病院で診察を受けて、どこもけがなく、病院でミニカーのおみやげをもらってバスで山へ帰る。

《もりのぶらんこ》(8枚)

くまが、木にぶらんこを作ってもらって遊んでいると、うさぎがのせてほしいとくる。くまがダメ、というのでうさぎもぶらんこを作ってもらう。次にたぬきがのせてほしいとくるが、やはりダメといわれ、同じ木にぶらんこを作ってもらう。きつねも同様で、とうとう一本の木に4つのぶらんこが吊されてしまう。みんなで乗って遊んでいると、木がいたい、と悲鳴をあげる。びっくりしてぶらんこから降りた4匹は、けんかを始めるが、木の提案で、ひとつだけにして順番に乗ることになる。

《りりんかっぱかっぱ》(12枚)

ろばが、うさぎの子どもたちを乗せて野原をりりん

かっぱかっぱと歩いていくと、りすの子どもに会い、いっしょにいくと、今度はさるの子どもたちにも会って大ぜいでいっしょに歩いていく。しばらくいくと、ぶたが寝ていて、ろばが子守りの手伝いを頼んでもいやだという。ろばは大きな木の下でおにごっこをしたり、自分の背中をすべり台にしたりして子どもたちと遊ぶ。そのうち雨が降ってくる。みんなで木の下で雨やどりしていると、あの時のぶたがぬれてやってくるが、さっきいじるをしたから仲間に入れてあげない。ぶたが困っていると、おつかいから帰ってきたうさぎのおかあさんに出会う。ぶたはおかあさんを背中中にのせていって、みんなに許してもらおう。いつのまにか雨もやんで、きれいな虹がでている。

《おおきなだいこん》(12枚)

これは、有名な《おおきなかぶ》の話と同じで、かぶをだいこんに替えたものである。

おじいさんが大根の種を蒔く。太陽と雨のおかげで大きな大きな大根ができる。おじいさんは抜こうとしてひっぱるが抜けない。おばあさんを読んでいっしょにひっぱるがやはり抜けない。太郎を読んでひっぱり、犬を読んでひっぱり、猫、ねずみと次々に呼んではひっぱるが抜けない。しまいには、見ている子どもたちに呼びかけ、いっしょにひっぱってとうとう抜ける。抜けた大根をみんながかついでねりあるく。

〔対象〕

当研究所における育児講座の2歳児、保育所に通う2歳児あわせて延べ194名、保育所、幼稚園などに通う3歳児延べ104名、4歳児延べ92名であり、紙芝居ごとの人数は表1に示す通りである。

〔手続き〕

1. 紙芝居は、すべて同じ1人の保育者が行ない、対象が違っても、ことばや仕草など、演技方が一定になるようにした。

2. 観察は、4人の観察者で行ない、場面別記録用紙を用い、各場面ごとに対象児ひとりひとりの反応を記録

表1 対象児

(人)

	こぐまの こぐちゃん		もりの ぶらんこ		りんりん かっぱ		おおきな だいこん		合計
	男	女	男	女	男	女	男	女	
2歳	41	41	26	26	20	20	10	10	194
3歳	14	14	14	14	14	14	10	10	104
4歳	12	12	12	12	12	12	10	10	92
合計	67	67	52	52	46	46	30	30	390

する。

〔観察期間〕

1984年11月～1986年3月

Ⅲ 結果

観察記録を年齢別に、1.各紙芝居の集中度、2.場面別の集中度、3.反応の分析、という3つの視点で整理した。

1. 紙芝居の集中度

紙芝居のひとつひとつについて、場面ごとに集中してみている反応を(+)、よそみをしたり、歩きまわっていたり、といった集中していない反応を(-)とし、一場面に両方の反応があった場合を(±)としてその割合を出した。その結果をまとめたものは、表2に示す通りである。また、動作的反応をP、言語的反応をVとした場合のPとVの割合は表3に示す通りである。ここから次のような結果が得られる。

1) どの紙芝居でも、年齢が高くなるにつれて集中度も高くなる傾向がある。また、2歳と3歳のあいだで大きく変化していることがわかる。

2) (-V)は、2歳児だけにみることができる。(これは、たとえば紙芝居の最中に他の子の靴を指さして「まいちゃんのおんなじだノ」というように、紙芝居の内容に直接関係のないことばである。)

3) PとVについてみると、紙芝居の読み手が子どもたちの反応をさそうような働きかけをしている場面(《こぐまのこぐちゃん》で「こぐちゃんて呼んでみてノ」と

呼びかける。また《おおきなだいこん》で「みんなもいっしょにひっぱってくれる?」と呼びかける。)では、2歳児でもそれに応じて《こぐまのこぐちゃん》の(+V)と《おおきなだいこん》の(+P)の割合が高くなっている。そうしたさそいかけのない2つの紙芝居では、2歳と4歳の(+P)と(+V)の割合には大きな差がでている。

表3 動作的反応(P)と言語的反応(V)

(%)

		こぐまの こぐちゃん		もりの ぶらんこ		りんりん かっぱ		おおきな だいこん	
		+	-	+	-	+	-	+	-
2歳	P	31.2	16.2	32.1	29.3	17.4	46.8	40.0	35.4
	V	51.7	0.9	38.6	0.0	31.5	4.3	23.1	1.5
3歳	P	52.0	2.6	24.8	6.7	43.6	16.1	51.3	18.1
	V	45.4	0.0	68.5	0.0	40.3	0.0	30.6	0.0
4歳	P	51.8	2.7	23.3	3.5	22.1	1.2	32.2	10.7
	V	45.5	0.0	73.2	0.0	76.7	0.0	57.1	0.0

2. 場面別の集中度

集中度を場面別に示したものが図1-1～図4-3である。紙芝居ごとにみていきたい。

1) 《こぐまのこぐちゃん》の場面別集中度

この紙芝居で、特に集中度が低くなるのは、2歳と4歳の③の場面、2歳の⑦、2歳と3歳の⑧の場面である。③は、こぐちゃんがころんでつみきの車がばらばらになっている場面であり、2歳ではじっとすわっていらなかったり、紙芝居にさわりに出てきたりする子どもがいると、他の子どももつられて出歩くなどがみられ、4歳では、車がばらばらになった様子を話し出す友だちに気をとられたりしている。⑦はおみやげのミニカーがでてくる場面であり、2歳児は、自分の知っている車をさわりに出てくる子どもにつられて立ったり出てくる子どもが何人もでてざわつくことが多い。⑧は、こぐちゃんがバスに乗って山へ帰る場面であり、最終場面であるが、「もうおしまい」と思って次の行動に移ろう

表2 紙芝居別の集中度

(%)

	こぐまのこぐちゃん			もりのぶらんこ			りんりんかっぱ			おおきなだいこん		
	+	±	-	+	±	-	+	±	-	+	±	-
2歳	86.3	7.9	5.8	81.4	6.5	12.2	86.0	3.6	10.4	83.3	12.5	2.1
3歳	93.8	6.2	0.0	97.4	2.6	0.0	94.2	3.9	1.9	91.7	7.5	0.8
4歳	96.9	3.1	0.0	98.9	1.1	0.0	97.5	1.4	1.1	92.9	7.1	0.0

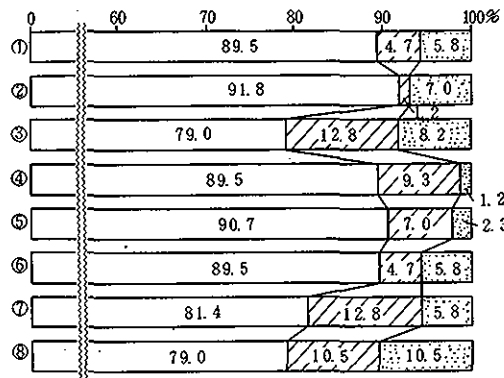


図1-1 こぐまのこぐちゃん(2歳)

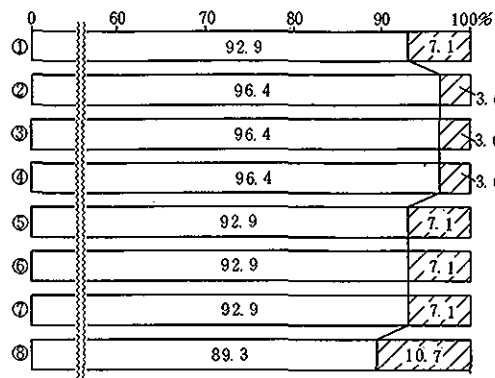


図1-2 こぐまのこぐちゃん(3歳)

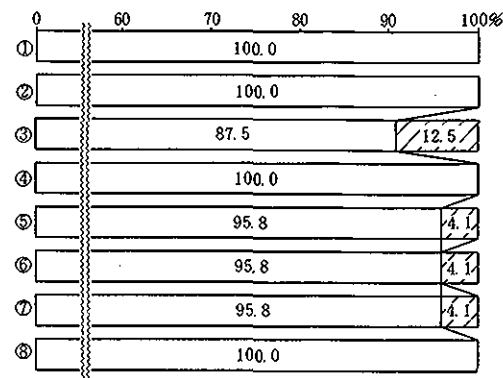


図1-3 こぐまのこぐちゃん(4歳)

□ +
▨ ±
▤ -

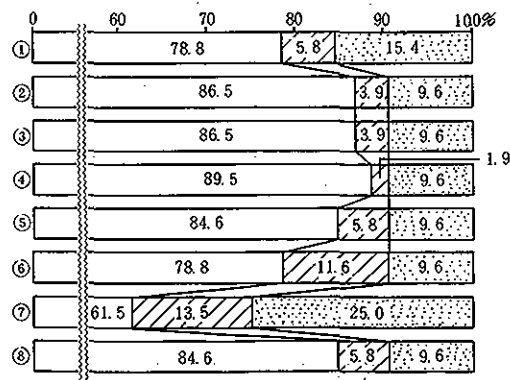


図2-1 もりのおらんこ(2歳)

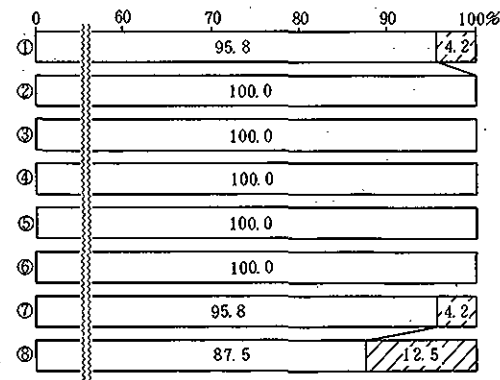


図2-2 もりのおらんこ(3歳)

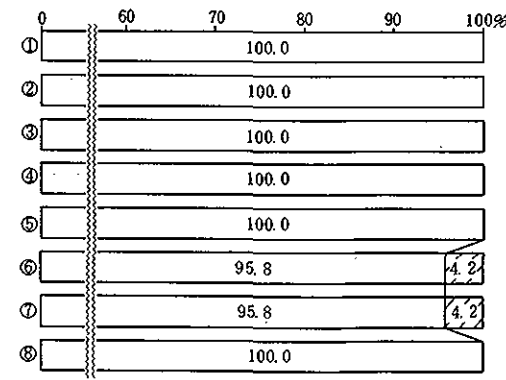


図2-3 もりのおらんこ(4歳)

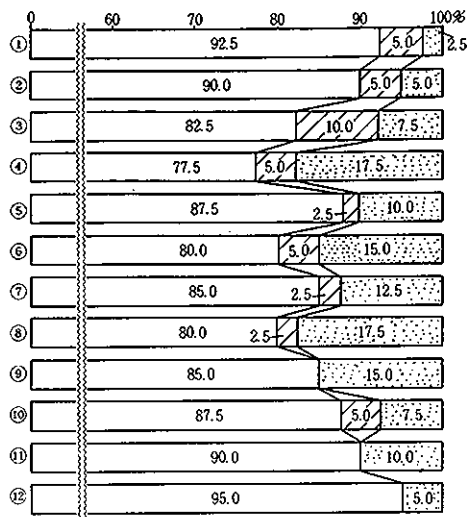


図3-1 りんりんかっぱかっぱ (2歳)

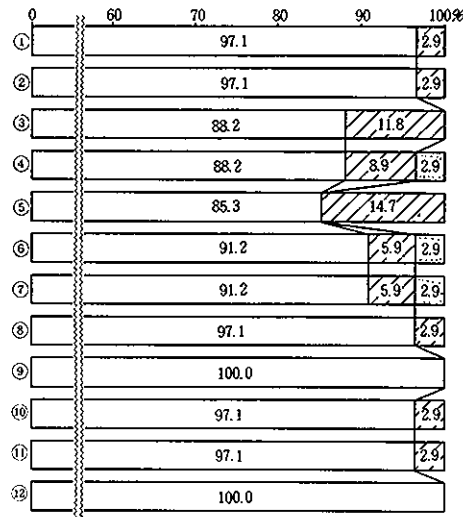


図3-2 りんりんかっぱかっぱ (3歳)

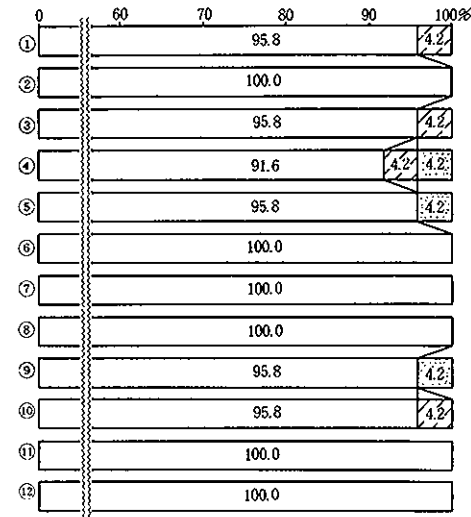


図3-3 りんりんかっぱかっぱ (4歳)

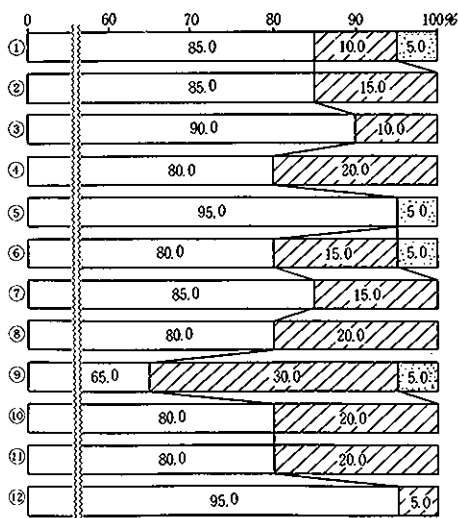


図4-1 おおきなだいてん (2歳)

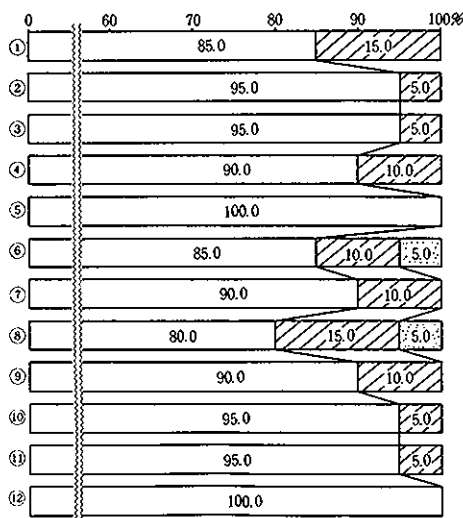


図4-2 おおきなだいてん (3歳)

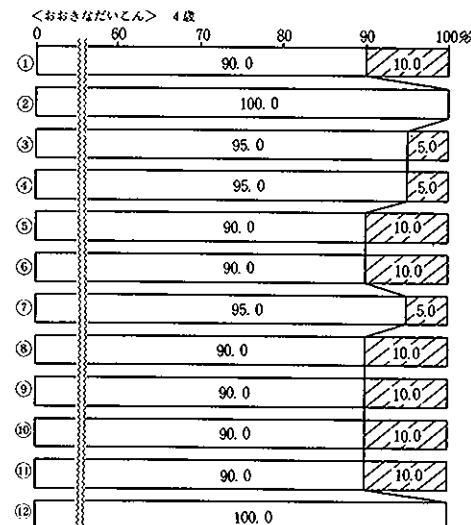


図4-3 おおきなだいてん (4歳)

として、画面から注意がそれている傾向がある。

2) 《もりのぶらんこ》の場面別集中度

この紙芝居で集中度が低くなるのは2歳児で①、⑥、⑦⑧の場面、3歳児で⑨の場面である。①は、くまがぶらんこをしている場面で、はじめの部分である。⑥は、くま、うさぎ、たぬき、きつねのみんなが木のぶらんこをこいでいる前半と、木が「いたい、たすけてくれ」という後半で別れている。ここでは、前半で集中がきれていた子どもたちが、「いたい」の声に集中する傾向がみられる。⑦は、けんかの場面であるが、けんかの説明とその解決の話であり、2歳では飽きている様子がみられる。⑧は、みんなが順番にぶらんこに乗るという場面で、乗っているとき「ひとつふたつ、みっつ……」と数えることばに反応するほかは、注意がそれているようすがみられた。

3) 《りりんかっぱかっぱ》の場面別集中度

この紙芝居では、集中度の場面別の流れをみると、2歳から4歳まで同じ形を示す部分と、2歳と3・4歳とでまったく異なる形を示す部分とがはっきりわかれた。

共通している部分は、④を最大とする③～⑤の場面と⑨、⑩の場面である。③～⑤では、③でさるが加わり、④でぶたがねていてささってもこない場面があり、⑤では、ろばの背中にかわりばんこに乗って歩いていく場面になる。⑨、⑩は、ぶたが再び登場するがいてもらえず、雨の中を歩いているとうさぎのおかあさんに会う、という場面であり、2歳の場合は、次の⑩でぶたがうさぎのおかあさんを背中にのせてきて、みんなに許してもらうという場面でも(一)は減っていない。2歳と3・4歳とが対照的な反応を示したのは⑥～⑧の場面である。⑥では、おにごっこをしたりろばの背中をすべり台にして動物たちが遊んだりし、⑦の後半で、空がくもってきてポツンポツンと雨がふりはじめ、⑧では雨がザアザア降ってきて、大きな木の下でみんなで雨やどりをする。2歳では、注意のそれているこれらの場面で、3歳・4歳はよく集中している。

4) 《おおきなだいこん》の場面別集中度

この紙芝居では、ひとつの場面全部をみていない(一)で示される)子どもは比較的少ないが、同じ場面で注意がそれたり集中したり(土)で示される)する場合が多い。各年齢とも比較的集中度が低いのは①の場面である。2歳と3歳では④、⑥、⑧の場面、2歳では⑨の場面である。①はおじさんが畑に種を蒔いたところである。④は、おばあさんがよばれて登場してくる場面であり、集中のよくなる⑤で初めて「ヨーイショヨイショ」のかけ声で大根ぬきが始まる。⑥は太郎の登場である。⑦でまた集中が良

くなるが、ここで犬が登場している。⑧は、猫が登場してひっぱり、⑨ではねずみが登場している。この場面で「みんなもいっしょにひっぱってね」と読み手が働きかけており、2歳では、それまで注意がそれていた子どもたちが、その呼びかけに応じて集中するようすがみられる。⑩で、ようやく大根が抜ける。4歳では、⑧～⑩の場面で集中度の変化がみられないのが、2・3歳と違っている。

3. 反応の分析

反応の内容については、1)紙芝居のことばに対する反応、2)ストーリーに対する反応、3)画面に対する反応、4)他の子どもたちに対する反応、の4点から整理した。

1) 紙芝居のことばに対する反応

繰り返しのことばのリズム — 《もりのぶらんこ》での「ダメダメダメダメダメ」、《おおきなだいこん》の中での「ヨーイショヨイショ」など、4種のうち3つの紙芝居までが、繰り返しのことばのリズムのおもしろさを中心に話が展開されている。これらに対して、リズムに応じる点では、どの年齢でも反応がみられたが、いっしょに声をあわせて言う、という反応は年齢が高くなるにつれて多くなり、また、繰り返しののでてくる予測ができてはやくから反応するのも年齢の高い子どもたちであった。

繰り返し以外のことばへの反応 — 以上のようなくりかえし以外でも、2歳児ではおもしろい言いまわしをそのまま模倣することが見られた。たとえば、「おさがキキキッて言ったの」という読み手のことばをそのままおうむ返しにうれしそうに言う、などである。こうした反応は、3歳・4歳ではみられなかった。また、「ピーポーピーポー」という声に、それまで集中していなかった子どもがパッと振り向いたり、こぐちゃんがころんで「いててて」というのを聞いて、自分のおしりをさする、また、《もりのぶらんこ》で木が「いたいいたい」というと集中する、等という行動もみられた。

2) ストーリーに対する反応

ストーリーに対しての反応として明確なものは全体としてあまり多くないが、2歳では、たとえば《こぐまのこぐちゃん》の病院で診てもらうという場面で「注射しない？」と聞いたり、《もりのぶらんこ》の乗せてほしいと動物が頼む場面で「いいよ」と応じたりする(紙芝居ではダメという)ことがみられる。3歳・4歳になると、こうした自分を中心とした反応はみられない。4歳になると繰り返しによってストーリーが展開する紙芝居で、たとえばだいこんをひっぱる繰り返しの対し、2回めくらいから待ちかまえていっしょにやったり、とい

た、展開を理解した反応が多くみられ、2歳児にはそうした予測のできている反応はみられなかった。

3) 画面に対する反応

新しいものが画面に登場すると、子どもたちはさまざまな反応を示すが、2歳児の場合は、指差しだけではなく、席を立てて前に出ていき、画面にさわろうとする行動が多くみられた。3歳・4歳では、出てくることはほとんどなく、指さしをして名前を言う、などの反応がみられた。また、2歳児では、一度画面に登場したものが描かれていないと、「ぶたさんがいない」とか「つみき、どこへいったの？」などという反応がみられた。画面に対する反応は、4種の紙芝居では、《こぐまのこぐちゃん》が各年齢とも多くみられた。

4) 他の子どもたちに対する反応

集中している場合には、他の子どもの言ったことばを真似して言う程度であるが、他の子どもたちの影響を受けることも少なくない。特に2歳児の場合は、ひとりが足をバタバタさせると、それが何人にも伝がっていく。また、紙芝居を指さしに前に出ていく子どもがいると、つられていっしょに前へ出ていき、そのままふらふら歩きまわってしまったりする。3歳・4歳の場合は、他の子どもの動きにちらと目をやることはあるが、そちらにひきずりこまれずに、紙芝居にすぐもどる様子が観察された。

IV 考 察

以上、4種類の紙芝居における2歳児の反応を、3歳児、4歳児との比較で述べてきたが、1.集中度にみられる2歳児の特徴、2.反応の分析からみた2歳児の特徴という2点から考察していきたい。

1. 集中度にみられる2歳児の特徴

図1-1～1-4でもわかる通り、2歳では集中していない反応がかなりみられる。紙芝居によって、集中のしかたの特徴は異なるが、年齢差がどの紙芝居についてもはっきり出、特に2歳と3歳の間に大きな開きがあることは、2歳児にとって紙芝居を集中して観るということの難しさを示しているといえよう。

2. 反応の分析からみた2歳児の特徴

反応の内容について、1) 繰り返しなどのことばに対する反応、2) ストーリーの理解、3) 画面に対する反応、4) 他の子どもたちからの影響、という点から考察したい。

1) 繰り返しなどのことばに対する反応

今回使用した紙芝居の繰り返し場面では、どれも、ことばがリズムカルに作られており、2歳児でもそのリズ

ムによって楽しめるものであった。しかし、楽しみ方は年齢によって異なり、4歳では、繰り返しを予測して一緒に言う、などの反応がみられるが、2歳児の場合は、そのことばがでてきて初めて反応しており、全体の流れの中ではとらえられていない。このことは、繰り返し以外でも、ことばの響きがおもしろいとそれに対してその場で反応する、ということにもあらわれており、表現そのものにひきずられるといった傾向を示すものといえよう。

2) ストーリーの理解

1) で、表現そのものに反応する傾向について述べたが、これは、ストーリーの理解という面からも分析できる。たとえば、《もりのぶらんこ》で、2歳では「いたい」と木が叫ぶ場面で急に集中度が高くなっても、その後どうなったかには関心がむかず、集中しなくなる例や、《おおきなだいこん》で、繰り返しのことば以外は集中していない例などに、2歳児がストーリーの展開を理解していない様子がみられる。また、《こぐまのこぐちゃん》で「注射しない？」と聞いたり、《もりのぶらんこ》で「乗せて」と頼む動物に「いいよ」と返事をするなどにみられるように、2歳児は紙芝居の世界を対象化できず、自分の世界ときちんと区別できていないと思われる。3歳でも、印象の強いものが出てくると、ストーリーからそれで自分の体験を話し出すといった例もかつてみられたが、^(注) 今回の観察では、3歳・4歳では、紙芝居のなかで、次はどうなるかを期待する反応がみられ、物語を対象化でき、ストーリーの展開の理解がすすんでいるように思われた。

3) 画面に対する反応

子どもの反応の中で、救急車、お医者さん、バス、動物などへの集中度が高いことは、身近なものへの興味が強いことを示している。また、画面に知っているものが登場すると、さわりに行くという反応は、紙芝居の世界を対象化できていないことと関連があると思われる。このことは、言語発達の上で、2歳では十分に思うことが言えない面があり、ことばで言うかわりに出ていって指さす、という行動に出ていることも考えられよう。また、興味をもったものが画面から消えるとそれを探したり質問したりするといった行動は、ストーリーと無関係に、個々の画面に興味をもつ段階であることを示している。

4) 他の子どもたちの影響

友だちといっしょに観ていることでの楽しさは、反応としてはあまりはっきりでていないが、ことばのリズムに魅かれて笑ったりするとき、となりどうして笑いあうなどは、ひとりで観ているのと違った楽しさがあること

を示しているといえよう。また、2歳児では、友だちが席を立ったりするとつられてしまう子どもが多く、紙芝居を観ている、という保育場面自体の認識が弱いことがうかがわれる。

V 結 び

2歳児の興味と理解についての特性を、紙芝居の観察を通して検討した。3歳児・4歳児との比較のなかで、場面ごとに分析した結果、2歳児が、紙芝居を、全体の流れを理解するのではなく、その場面ごとに興味のあるもの（ことば、絵など）に集中していることが明確になった。また、紙芝居の世界を対象化できず、自分と一体化する傾向があるように思われた。このような特徴を把握することで、紙芝居などを保育にとり入れる場合、材料の選び方も、また保育者の読み方も配慮できるのではないだろうか。材料そのものの吟味、また子どもたちの集団の特徴との関連などについては今後の課題としたい。

本研究にあたり、ご協力いただきました保育所、幼稚園の先生方、ならびにお母様方に感謝いたします。

（注）星美智子他：3歳児の興味と理解に関する研究——劇あそびを通して——日本総合愛育研究所紀要第12集（昭和51年）

＜参考文献＞

- 1) 星美智子他：3歳児の興味と理解——紙芝居を通して——日本総合愛育研究所紀要第14集（昭和53年）
- 2) 三宅和夫他：二—四歳の発達の特徴と保育 岩波講座「子どもの発達と教育4」岩波書店 1979
- 3) 星美智子他：2歳児の行動特徴 日本総合愛育研究所紀要第16集（昭和55年）
- 4) 星美智子他：2歳児の行動特徴に関する研究(2)——“笑い”の観察を通して——日本総合愛育研究所紀要第17集（昭和56年）

本研究は、1980年度から継続してきた一連の研究であり、初年度からの共同研究者、清水玲子（埼玉県立衛生短期大学）、植村規代（2歳児研究グループ）、小林千鶴子（2歳児研究グループ）との共同研究であることを記します。